

2019年

11月号No.105
毎月6日発行



原水協通信 (茨城版)

原水爆禁止茨城県協議会 〒310-0912 茨城県水戸市見川5-127-281 茨城平和会館内
TEL/FAX 029-251-9919 e-mail antiatom-i@email.plala.or.jp 会長 加藤 岑生

原水協通信
頒価 ¥220/月

核兵器廃絶署名
47,519筆
('19.10/31)

自治体から「核兵器禁止条約」の意見書の請願を、安倍内閣へ！

9月議会からさらに一歩進んで、12月の地方議会に向けた日本政府の「核兵器禁止条約」への調印、批准を求める自治体意見書の取り組みを大きく広げましょう。全国1,741自治体の中で423自治体(2019年10月4日現在)が意見書を採択。県内では、全45自治体の中で6自治体が意見書を採択(土浦、守谷、つくばみらい、大洗、常陸大宮、筑西)しています。全自治体過半数を目指しましょう。

12月議会に向けて地域の団体と協力して、請願・陳情を勧めましょう。

「日本非核宣言自治体協議会」へ参加を要請しましょう。すでに県内では、水戸、日立、つくば、鹿嶋、神栖、潮来、土浦、大子、大洗、美浦、東海の11市町村が加盟しています。

12月県議会へ団体署名で請願します。請願書は団体ごとに団体名、責任者名、団体印または責任者の印鑑が必要です。署名用紙は県原水協へ。

核兵器禁止条約 新たにドミニカが批准

10月18日、新たにドミニカ連邦が批准書を国連事務総長に寄託、33カ国となり、発効まで残り17に。



県原水協 拡大4役会議開く 2019.10/22

雨の中、みと交流プラザで拡大4役会議を開きました。今回は、前回の会議で十分に話し合えなかった事項について、議論を深めることを目的に行いました。ただ、水害に遭われた役員や、それぞれの所属団体の都合などで、参加者が少なかったのが残念でした。

①平和行進について：今後は各地域オルグをやめ、県内をいくつかのブロックに分け、ブロック長がその年の目標と取り組みについて話し合い、各地域が自主的、自律的に組織化する。

※ 来年は北海道出発を5日遅らせる。五輪の聖火リレーもあり日程とどう絡むか、まだ明らかにはなっていない。

②世界大会参加について：参加者の宿と「足」の確保を早くしないと、経費増も含め、支障をきたす。

③物品販売について：収益は、県内通し行進者の宿泊費などに充てています。100%賄うことはできませんので、できるだけご支援下さい。

④ちひろカレンダーについて：毎年、新婦人任せになっています。各団体とも新婦人の領分を侵さぬように販売に力を入れれば、県・地域の財政にかなり貢献できると思います。宜しくお願いします。

「核兵器廃絶を！」の声1051万人分、被団協が国連に提出

日本原水爆被害者団体協議会(被団協)の事務局次長・藤森俊希さんは10月11日、軍縮を議論する国連総会第一委員会を訪れ、1051万7872人分の署名目録をヨレンティ議長に提出しました。日本政府が禁止条約に反対の態度のなか、藤森氏は提出に当たり、国民の六割が条約を支持している(世論調査)なかで、「政権と国民の意識が



国連の中満泉・軍縮担当上級代表は、「軍縮の議論は非常に厳しい状況だが、だからこそ軍縮が国連の中心課題でなければ」と話しました。核兵器の開発から使用までを全面禁止する「禁止条約」はこれまで33カ国が批准、発効まであと17カ国に迫りました。

「1000万人を超えるこの署名を力に、さらにたくさんの署名が集まるよう努力し、条約の早期発効に繋げたい」と述べました。ヨレンティ議長は、「核兵器は人類のみならず、すべての生命存続の脅威」「核兵器は削減や管理でなく、みんなが廃絶のための行動をしなければならぬ」と語りました。

今月の草花



撮影：柳岡 (子ども食堂にて)

ジンジャー(花縮砂・ハナシユクシヤ)

シヨウガ科の多年草。インド・東南アジア原産。花壇や切り花で親しまれています。夏から初秋にかけて咲き、白や黄色系は強い香りを放ちます。大きくなると1.5mもの丈になるので、支えがないと倒れやすい。近年、日本では様々な品種が作られています。

私はかつて、「ジンジャー||シヨウガ」と思い、ジンジャー・エールを連想しました。しかし、現代は多様性に溢れ、変化に富んだものが次々に現れています。昔の概念が通じなくなっているが、地球規模での流通における土壌の移動で、問題は起きないのでしょうか？(柳)

原水爆禁止2019世界大会 国際会議宣言 (要旨のみ抜粋)

被爆75年の2020年を「核兵器のない平和で公正な世界」への転機とするため、被爆者とともに立ち上がることを呼びかける。核兵器は、人間の尊厳を徹底して踏みにじる悪魔の兵器である。核保有5カ国は「核抑止」に固執、禁止条約に強く反対し、核不拡散条約の核軍縮義務(第6条)や従来の誓約・合意までも反故にしようとしている。「核なき世界」を求める声は、圧倒的多数である。核固執国と廃絶を目指す勢力の対立こそ、核軍縮をめぐる世界の縮図である。

2000年以降のNPT再検討会議での合意や核兵器禁止条約の成立は、世界の世論と運動である。世界の国々の緊張は、国連憲章を遵守し、対話と外交で解決すべきである。武力による威嚇・挑発を厳に慎み、平和解決への努力を強く求める。

我々は、被爆国に相応しい役割を政府に求める。アメリカの「核の傘」から離脱し、禁止条約へ署名・批准すべきである。

原水爆禁止世界大会inニューヨークのよびかけ 核兵器廃絶、気候の危機の阻止と反転、社会的経済的正義のために

2020年4月24日～26日、開催地：ニューヨーク市マンハッタン

現在、世界では核戦争、気候の危機、人種主義、弾圧、不平等などの増大により、人々の命と希望を切り捨てています。4月の世界大会は、青年が先頭に立つ運動を発展させるまたとない機会を創り出します。

気候変動の危機は、4つに1つの生物種が危機に瀕し、生態系が脅かされ、人間の命と福利に重大な影響を及ぼし始めています。

2020年発効が期待される核兵器禁止条約は希望の光であり、世界の多くの非核国の優先課題です。それは「人類と核兵器は共存できない」という被爆者の警告に光を当て、再検討会議に私たちの廃絶の声を響かせる絶好の機会となるでしょう。

※ 世界大会参加のため、みんなで学習し、参加の意義を十分理解し、署名、カンパを多くの方に働きかけていきたいと思います。



下記の詩は、サーロー・セツコさんが「光に向かって這っていけ(岩波書店)サーロー・節子/金崎由美著」の中で紹介した「生ましめんかな」の詩で有名な、栗原貞子さんの「ヒロシマというとき」です。

サーローさんは少女の時に被爆、広島女学院大学を卒業。カナダ人のジム・サーローと結婚してカナダに渡る。周囲からの激しい妨害を乗り越え核兵器の「非人道性」を、心血を注いで訴え続けた渾身の書です。

この本を多くの方に普及し、今後の運動に役立てたいと考えています。茨城県原水協では注文を受け付けていますので、ぜひ、ご連絡下さい。

連絡先：茨城県原水協

☎&Fax：029-251-9919

台風被害のお見舞いを、申し上げます。

度重なる台風の襲来に、全国でも茨城県内でも、被災された多くの方々に、衷心よりお見舞い申し上げます。

台風19号では堤防の決壊も至るところで起き、幹線道路・生活道路の寸断、鉄道や空の便も乱れに乱れ、家屋の水没や流失、農作物の冠水など、筆舌に尽くしがたい被害が出ています。全国では死者76人、行方不明16人。

茨城県内でも那珂川・など久慈川などの堤防が決壊し氾濫、水戸市を始め大子、常陸大宮、常陸太田、城里、ひたちなかでは全壊、半壊、一部損壊、床上・床下浸水は四千世帯以上。農作物(特に露地野菜の白菜・キャベツなど)の被害も甚大になる模様です。

台風の被害は勿論「自然災害」ですから未然に防ぐことは困難です。しかし、インフラが整備され



写真は水戸市渡里付近

なかつたのではないのでしょうか。日本の軍事費は約5兆2千6百億円(18年度)これに対して防災関係予算(国土強靱化対策を含む)は、二兆四千億円(前年度補正予算を含め)です。これでは防災対策を軽視してきた「人災でない」と誰が言えるのでしょうか?

ヒロシマというとき

〈ヒロシマ〉というとき

〈ああ ヒロシマ〉と

やさしくこたえてくれるだろうか

〈ヒロシマ〉といえば(パール・ハーバー)

〈ヒロシマ〉といえば(南京大虐殺)

〈ヒロシマ〉といえば 女や子供を

壕のなかにとじこめ

ガソリンをかけて焼いたマニラの火刑

〈ヒロシマ〉といえば

血と炎のこだまが 返ってくるのだ

〈ヒロシマ〉といえば

〈ああ ヒロシマ〉とやさしくは

返ってこない

アジアの国々の死者たちや無告の民が

いつせいに犯されたものの怒りを

噴き出すのだ

〈ヒロシマ〉といえば

〈ああ ヒロシマ〉と

やさしく返ってくるためには

捨てたはずの武器を ほんとうに

捨てねばならない

異国の基地を撤去せねばならない

その日までヒロシマは

残酷と不信のいがい都市だ

私たちは潜在する放射能に

灼かれるバリアだ

〈ヒロシマ〉といえば

〈ああヒロシマ〉と

やさしく返ってくるためには

わたしたちは

わたしたちの汚れた手を

きよめねばならない

編集後期

東北、関東、長野も含む広い地域で大小河川の氾濫により、甚大な被害が出ています。これは「地球温暖化の影響」と言われますが、抗えないものでしょうか。決してそうではないでしょうか。

各国政府に早急な対策を求めたスウェーデンの16歳の少女の憤りは、納得できます。勿論、彼女は純粋な気持ちの発露でしょう。しかし、それは、ヘタをするとは原発推進派に利用されかねません。

これはあくまで私の個人的な印象ですが、20〜30年前までは原発反対派と核廃絶派が、あたかも「反比例」の状態でした。つまり、前者は後者の、後者は前者の主張に関心が薄かった傾向を感じました。しかし、最近やっと歩み寄り始めたと感じます。

これは、「原子力の平和利用」の思考からようやく脱し始めたのと軌を一にするのではないかと思います。

原発に固執するのは、核を持つとうとすることと同じです。核は飾りではありません。日本は有り余るプルトニウムを持ちつつ原発の再稼働をしておりますが、これをどうするつもりでしょうか。(柳)